

## 帝国ホテルの舞踏会 (1891-1926) The ball at the imperial hotel (1891-1926)

村山茂代  
Shigeyo MURAYAMA

### Abstract

This study will explore balls at the Imperial Hotel in Tokyo from 1891 to 1926.

The first ball was held on November 3, 1891 when the Minister of Foreign Affairs sponsored a gala party at the Imperial Hotel to celebrate the Emperor's birthday. On this occasion, members of Japanese high society and foreign diplomatic officials were invited and they danced the Quadrills, the Waltz, the Caledonian and other dances. This party to celebrate the Emperor's birthday was held at the hotel every year until 1903.

The second Imperial Hotel was completed on September 1, 1923 and it was designed by the American architect, Frank Lloyd Wright (1867-1959). The hotel had a beautiful ballroom called the Peacock Room and it became the venue for many balls, such as the St. Valentine's, Christmas, and various charity balls. Partygoers enjoyed dancing the One step, the Two step, and the Foxtrot which were very popular at the time.

The Imperial Hotel always produced beautiful and elegant balls. There, it was a special world in Japan, far from everyday life of ordinary Japanese people.

*keywords : the Imperial Hotel, the Quadrilles, the Foxtrot*

### I. はじめに

社交ダンス(舞踏)がわが国に導入されたのは、明治17年10月27日鹿鳴館でヤンソン(Johannes Ludwig Janson, 1849-1914)<sup>1)</sup>を舞踏教師として、上流階級の人々を対象に始めた舞踏練習会(舞楽会)であった。男女が手を取りあって踊る舞踏は、当時の日本人にとって簡単に受け入れられるものでなかったが、舞踏の練習は、欧化政策を推進していた政府高官たちの半ば強制であった。当初、舞楽会の会員は政府高官、外国公大使、御雇外国人等とその夫人や令嬢たちに限られていた。練習会は毎週月曜日の夜に開かれ、明治20年頃まで継続した。会員のなかには次第に舞踏を踊る楽しさを知って積極的に練習会に参加するようになった者もいたであろう。しかし、舞踏会において多くの日本人は舞踏を踊ることに消極的であった。

舞踏練習会と平行して、鹿鳴館では外国からの貴賓を招待して夜会がしばしば開かれていた。中でも外務大臣主催の天長節夜会(11月3日)は最も華やかであった。この夜会で上流階級の日本人と外国人が共に舞踏

を踊ったのであった。

明治24年(1891)より鹿鳴館の建物の老朽化により、天長節夜会は明治23年11月3日に開業した初代帝国ホテルに会場を移して開催されるようになった。その後、明治26年に一度だけ鹿鳴館で開催されたことがあったが、明治36年まで天長節夜会は帝国ホテルを会場としていた(表1)。

初代帝国ホテルで開催された舞踏会は天長節夜会の他に、大正初年代後半にクリスマス舞踏会が行われていたようであるが、当時の新聞にわずかに報じられたのみで、帝国ホテルにも研究資料となるものは残されていない。

大正12年9月1日、二代目の帝国ホテル(ライト館)は落成祝賀会の直前に関東大震災にみまわれたが、ホテルの被害は軽微であった。震災後しばらくの間、社交ダンスが踊れる場所は帝国ホテルだけとなり、ライト館では多くの舞踏会が開かれた(表2)。

鹿鳴館での天長節夜会について近藤富枝『鹿鳴館貴婦人考』(講談社、昭和58年)および富田仁『鹿鳴館—擬西洋化の世界—』(白水社、1984年)などの研究があり、夜会で踊られた舞踏についても言及されている。しかし、初代帝国ホテルでの夜会については、帝国ホ

日本女子体育大学(非常勤職員)

表1 初代帝国ホテルの舞踏会

| 年 月 日              | 舞 踏 会    | メ モ   |
|--------------------|----------|---|
| 明治24年 (1891) 11月3日 | 天長節夜会    | 「舞踏室は殆ど外国の淑女紳士にて充たされたり舞踏受持ち接待係は彼方此方に周旋して頻りに踊り手の多からんことを努めた」。招待客(紳士) 2,000人 |
| 明治25年 (1892) 11月3日 | 天長節夜会    | 行き届いた接待, 見事な夜会であった  |
| 明治26年 (1893) 11月3日 |          | 鹿鳴館で開催の天長節夜会の立食料理調製   |
| 明治27年 (1894) 11月3日 |          | 日清戦争のため天長節夜会中止  |
| 明治28年 (1895) 11月3日 |          | 北白川親王殿下御病癒御篤の為夜会中止  |
| 明治29年 (1896) 11月3日 | 天長節夜会    | 来賓は1,200~300人ほど。喫煙室は煙が充満, 廊下にまで渦巻く。舞踏者は概ね外国紳士淑女, 邦人にも上手な人がいる              |
| 明治30年 (1897) 11月3日 |          | 皇太后崩御のため天長節夜会中止   |
| 明治31年 (1898) 11月3日 | 天長節夜会    | 舞踏は何時ものように外客の専占, 無作法な行為に反省を   |
| 明治32年 (1899) 11月3日 | 天長節夜会    | 舞踏では本邦婦人の引きこみがちを遺憾  |
| 明治33年 (1900) 11月3日 | 天長節夜会    | 舞踏者は相変わらず外人客が多い   |
| 明治34年 (1901) 11月3日 | 天長節夜会    | 昨年より和装の婦人客多い。舞踏に加わった日本婦人昨年より多い  |
| 明治35年 (1902) 11月3日 | 天長節夜会    | 舞踏室は賑わい, 大盛会  |
| 明治36年 (1903) 11月3日 | 天長節夜会    | 場所が狭く立食時混雑  |
| 明治37年 (1904) 11月3日 |          | 日露戦争の為天長節夜会中止   |
| 明治38年 (1905) 11月3日 |          | 日露戦争の為天長節夜会中止   |
| 大正7年 (1918) 12月24日 | クリスマス舞踏会 | 各国大使館員その他紳士淑女約1,000人稀に見る盛会  |

メモ：『東京日日新聞』『東京朝日新聞』『帝国ホテル百年の歩み』より

表2 二代目帝国ホテル「ライト館」の舞踏会

| 年 月 日               | 舞 踏 会            | メ モ   |  |
|---------------------|------------------|---|--|
| 大正11年 (1922) 11月より  | ティーダンス<br>サバーダンス | 毎水・金, 4:30p.m.-6:30p.m.<br>毎火・土, 9:00p.m.-12:00p.m. |  |
| 大正11年 (1922) 12月15日 | 仮装舞踏会            | 東京朝日新聞 (12月5日) に予告                                  |  |
| 大正12年 (1923) 12月25日 | クリスマス舞踏会         | 宴会場は満員, 宴後のダンスも非常に盛況。邦人と外人殆ど半々                      |  |
| 大正13年 (1924) 1月27日  | 摂政宮御成婚祝賀の仮装舞踏会   | 各国大使館員, 上流紳士淑女から三越の女店員など身動きもできない大盛況                 |  |
|                     | 2月14日            | セントヴァレンタイン仮装舞踏会                                     | よき人求めて, 450人の内外人                                     |
|                     | 12月              | バンクロフト新駐日米大使歓迎舞踏会                                   |  |
| 大正14年 (1925) 1月14日  | 米国観光団の為の舞踏会      |   |  |
|                     | 2月14日            | 聖路加国際病院再建基金募集のための慈善仮装舞踏会                            | 仮装行列のあとに舞踏がはじまる。日比谷の署長は「大行社」を警戒して正・私服の警察官30人を従え入口に立つ |

メモ：『東京日日新聞』『時事新報』『帝国ホテル百年の歩み』『帝国ホテル百年史』より

テルの社史にわずかに述べられているのみである。永井良和『社交ダンスと日本人』（晶文社、1991年）や武内孝夫『帝国ホテル物語』（現代書館、1997年）は大正期後半のライト館で開催された舞踏会について述べているが、初代帝国ホテルで開催された天長節夜会については全く言及していない。また、永井は社会学の観点から社交ダンスをとらえ、日本における社交ダンスの受容と偏見や取締りの変遷について詳細に述べている。武内は帝国ホテルの発展とそれに関わる人々や事件について語り、社交ダンスについては特に新しいものを示していない。また、拙著『明治期ダンスの史的研究』（不味堂出版、2000年）においても帝国ホテルの天長節夜会やその時踊られた舞踏についてはふれていない。

以上のように、これまでの研究では鹿鳴館以後の天長節夜会の継続は不明確であり、また、夜会で踊られた舞踏についても明らかにされていない。すなわち、明治24年からの帝国ホテルを会場とした舞踏会については十分な研究が行われていない。この点に注目して、本研究では初代帝国ホテルでは天長節夜会を、またライト館では、ホテル独自の企画等で多くの舞踏会が開

かれているので、これらを研究の対象として研究を進めて行く。

## II. 目 的

先に述べたように、帝国ホテルの舞踏会については未研究の期間がある。それ故、本研究では、明治24年（1891）から大正15年（1926）までの帝国ホテルではどのような舞踏会が開かれたか。また、舞踏会で踊られた舞踏はどのような社交ダンスであったかを明らかにする。この研究によって、明治期から大正期にかけての社交ダンスの変遷が明確になると考える。

## III. 方 法

明治・大正期において、天長節は国家の重要な祝日であった。宮中での祝賀会、青山練兵場の観兵式、諸官庁での奉祝の式典、外務大臣主催の夜会など、一日の祝賀の様子を新聞は克明に報道している。また、ライト館での舞踏会についても新聞は報道を欠かしていない。それ故、当時の舞踏会を研究するためには、新

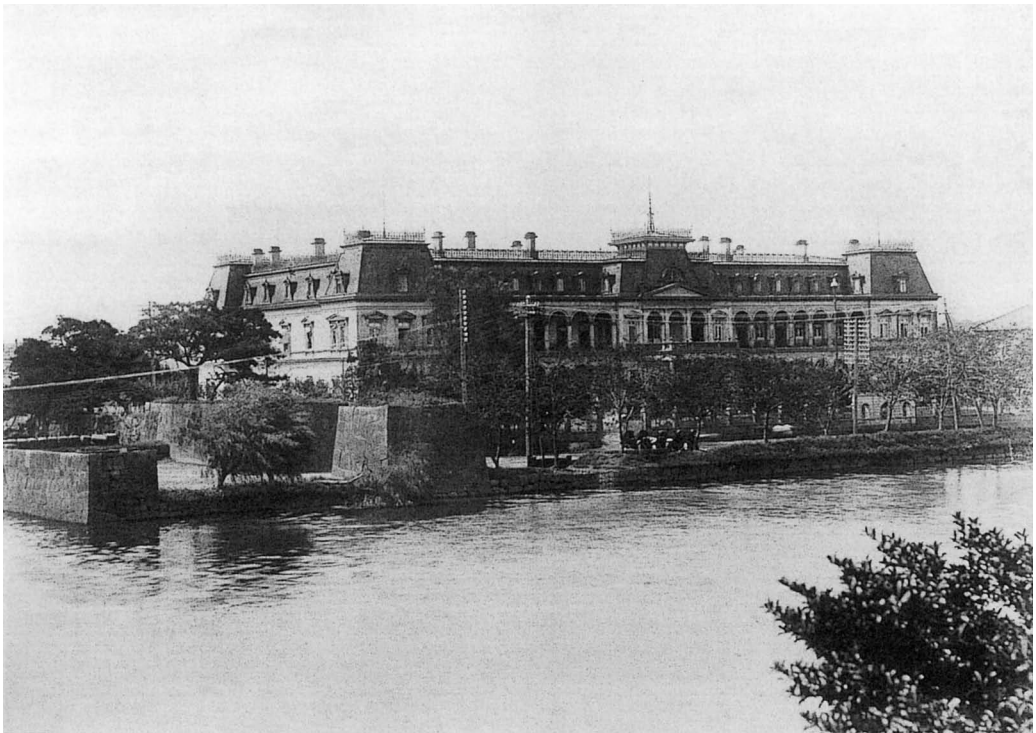


図1 開業当時の帝国ホテル  
(出典：Imperial hotel—A legend in pictures, 帝国ホテル, 2003年)

間は研究の原典である。そこで、明治19年から大正15年までに発行された『東京日日新聞』、『時事新報』を研究資料として、詳細に舞踏会の情報をくみとることにした。また、帝国ホテルの社史『帝国ホテル百年史』（帝国ホテル、1990）、『帝国ホテル百年の歩み』（帝国ホテル、1990）も主要資料とした。

#### IV. 初代帝国ホテルの舞踏会

帝国ホテルは、欧化政策を推進していた外務大臣井上馨（1836? -1915）の意思をうけ、当時の財界のトッ

プが発起人となって建設がすすめられた。設計は新進の建築家渡辺謙（1855-1930）<sup>2)</sup>が担当し、明治23年11月3日に日本で最初の本格的な洋風都市ホテルとして誕生した。

所在地は鹿鳴館に隣接した土地で、有楽町方面に正面玄関を向けて立つ風格のある建物であった。内部は客室数60にロビー、事務室、喫煙室、舞踏室、奏楽室、大小食堂、玉突き場、新聞縦覧室、厨房、配膳室などをそなえていた<sup>3)</sup>。

明治24年11月3日の天長節夜会から、東洋一を誇る帝国ホテルで開催されることとなった。民間のホテル

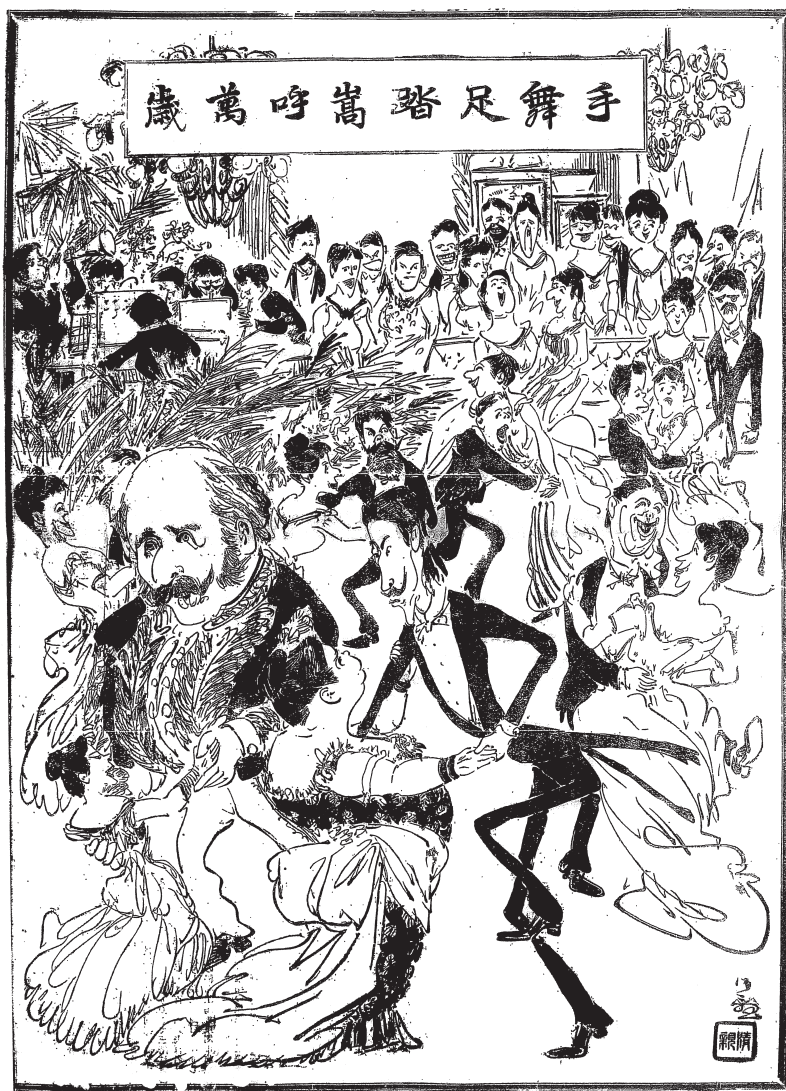


図2 舞踏会  
(出典：東京日日新聞付録，明治24年11月3日)

であったが鹿鳴館の老朽化のため、帝国ホテルがその役目をひきつぐこととなったのである。

『東京日日新聞』は、当時人気の画家小林清親(1847-1915)<sup>(4)</sup>による全面をカバーする挿絵を添えて、夜会を大々的に報じている。挿絵にみられるように、夜会の服装は、男性は燕尾服、女性は襟ぐりを大きくあけて肩や腕を出し、裳すそを引いた優雅なローブ・デコルテ又は白襟紋服が正装であった。日本女性の服装は年によって和装が多いときもあったようである。

夜会に招待されたカップルは、夜9時頃に会場に入り、10時には舞踏がはじまる。「小松宮殿下には閑院宮妃殿下の御手を、閑院宮殿下は戸田伯爵夫人の手を小松外務大臣は白国公使夫人の手を取りて順次舞踏室に臨み」<sup>(5)</sup>とまず、男性は自分の妻女ではない女性を舞踏室へエスコートするのが、欧米のフォーマルな社交場のエチケットであった。

舞踏は当夜のプログラムに添っておこなわれ、11時頃に立食の饗応をうけて再び舞踏を行い、1時又は2

時頃に散会した。また、横浜方面からの招待客のために臨時列車が用意されていた<sup>(6)</sup>。

天長節夜会は内外の貴顕紳士が集まる故、無作法なことがあっては、日本人の面目に関わるとして特に注意がはらわれた。新聞は、廊下を歩きながらの喫煙、婦人控え室を盗み見するなどの行為、また「舞踏を見ればやと靴のまゝ長椅子に上り果ては窓掛けを力に窓枠に立つもの」<sup>(7)</sup>、食堂では「例の如くナイフ・フォークの飛び交ふさま狂蝶の花に舞ふにも似て行儀の何たるを解するものは勿論苟も危険を感じずるものは寄り付き難き有様」<sup>(8)</sup>と日本人招待客の醜態を報じている。この時は、選ばずに多くを招待した結果だという<sup>(9)</sup>。

招待客の増加から、天長節夜会は明治39年より外務大臣官舎で行われるようになった。その後、外務大臣官舎での天長節夜会は戦争などのため度々中止されることもあったが、大正10年頃まで行われていたようである。また、舞踏は大正8年頃まで夜会で踊られていた(表3)。

表3 外務大臣官舎の舞踏会

| 年 月 日              | 舞 踏 会 | メ モ  |
|--------------------|-------|--|
| 明治39年(1906) 11月3日  | 天長節夜会 | 来賓は皇族、各国大公使、同大公使館職員、各省高等官、貴衆両院議員、実業家等、その婦人令嬢、総数約1,300人 |
| 明治40年(1907) 11月3日  | 天長節夜会 | 近年に珍しく盛会   |
| 明治41年(1908) 11月3日  | 天長節夜会 | 会場の装飾の美しさ  |
| 明治42年(1909) 11月3日  |       | 伊藤博文公国葬の為天長節夜会中止                                       |
| 明治43年(1910) 11月3日  | 天長節夜会 | 混乱無く終了   |
| 明治44年(1911) 11月3日  | 天長節夜会 | 外相夫人、各皇族妃殿下のローブ・デコルテや、コーテシーの美しさに賞賛                     |
| 大正1年(1912) 11月3日   |       | 天長節夜会中止  |
| 大正2年(1913) 10月31日  | 天長節夜会 | 東伏見宮、久邇宮、梨本宮の三宮妃殿下のローブ・デコルテの美しさ。舞踏は明治期と同じ種類。招待客約5,500人 |
| 大正3年(1914) 10月31日  |       | 第一次世界大戦の為天長節夜会中止                                       |
| 大正4年(1915) 10月31日  | 天長節夜会 | 戦中の為舞踏を中止  |
| 大正5年(1916) 10月31日  | 天長節夜会 | 霞ヶ関近く闇を衝いて馳せ集まる自動車、馬車、人力車秋の夜はこの一角にあわただしい               |
| 大正6年(1917) 10月31日  | 天長節夜会 | 晩餐会(舞踏は行わない)   |
| 大正7年(1918) 10月31日  |       | 天長節夜会中止(戦争、コレラの流行)                                     |
| 大正8年(1919) 10月31日  | 天長節夜会 | 5時10分夜会場裏手で装置爆弾炸裂、しかし、舞踏会の記事は「舞踏も樂も華やかに平和の大夜會」         |
| 大正9年(1920) 10月31日  |       | 不明   |
| 大正10年(1921) 10月31日 | 天長節夜会 | 晩餐会  |
| 大正11年(1922) 10月31日 |       | 不明、以後天長節夜会について不明                                       |

メモ：『東京日日新聞』より

天長節夜会で踊られた舞踏は、当時、欧米の上流階級の社交場で流行していた方舞や円舞であった。方舞とは、4組のカップルが方形に位置して音楽に合わせて順に、運動を進めていくダンスで、カドリール、ランサー、カレドニアンなどであった。円舞は、カップルが向き合ったポジションに組み室内を円形に踊るダンスで、ポルカ、マズルカ、ワルツ、ギャロップ、ツーステップなどであった。

明治26年11月3日の天長節夜会の「舞踏会の手帖」<sup>(10)</sup>によると、当夜の舞踏のプログラムは、1.カドリール、2.ワルツ、3.ポルカ、4.カレドニアン、5.ワルツ、(休憩)、6.ワルツ、7.マズルカ、8.ランサー、9.ワルツ、10.ギャロップ、の順に記されている。また、明治35年11月3日の天長節夜会では、1.カドリール、2.ワルツ、3.ポルカ、4.ランサー、5.ワルツ、6.ツーステップ、7.ワルツ、8.ランサー、9.ツーステップ、10.ギャロップの順に踊られた<sup>(11)</sup>。新しくツーステップが加わったのみである。また、ダンスの順は欧米の上流階級の舞踏会に倣って最後のダンスはギャロップで終わっている<sup>(12)</sup>。

これらの舞踏は、次第に天長節夜会に招待される上流階級の人々だけのものでもなくなった。明治30年代には、女子の学校で舞踏を体育教材として導入した。また、裕福な家庭のモダンな青年にとっても、当然舞踏は関心事であった。大正期に社交ダンスの導入に尽力した加藤兵次郎(1890-1954)<sup>(13)</sup>は、明治40年12月北海道函館で米国領事館の職員から初めて舞踏を習ったことを回想している。その時習った舞踏は、ワルツ、ラ

ンサー、カドリール、ポルカ、コチロンなどであったという<sup>(14)</sup>。加藤の回想からわかるように、鹿鳴館の時代から同じ種類のダンスが明治末期まで継続して踊られていたことがわかる。

## V. 二代目帝国ホテル(ライト館)の舞踏会

初代帝国ホテルは大正9年12月27日に別館が全焼。また、大正11年4月16日には本館が全焼する不幸な事件に見舞われたが、その一方で新しい帝国ホテルの建設が進められていた。帝国ホテルの二代目の建物(ライト館)は、アメリカの建築家フランク・ロイド・ライト(Frank Lloyd Wright, 1867-1959)<sup>(15)</sup>の設計により建設された。正面玄関<sup>(16)</sup>の前方に長方形の池を据え、ホテルの外観は「神秘的で荘厳な神殿」<sup>(17)</sup>のような、ホテルとしては極めて独創的な建築であった。美しい孔雀の装飾があった大宴会場「孔雀の間」では、数多くの舞踏会が開催された。

ライト館の建設中から既に舞踏会が始まっていた。大正11年11月にホテルのグリル食堂が開業すると、グリル食堂でのティーダンス(水・金、4:30p.m.~6:30p.m.)とサパーダンス(火・土、9:00p.m.~12:00p.m.)<sup>(18)</sup>をもうけた<sup>(19)</sup>。食事をすませてから親しい友人と社交ダンスを楽しむ時間であったが、社交ダンスを趣味とする富裕階級の人々が集まった。ティーダンスのチケットは1円<sup>(20)</sup>だったので特に賑わった<sup>(21)</sup>。

大正12年12月25日のクリスマス舞踏会は、関東大震災で甚大な被害をこうむったばかりにも関わらず大盛

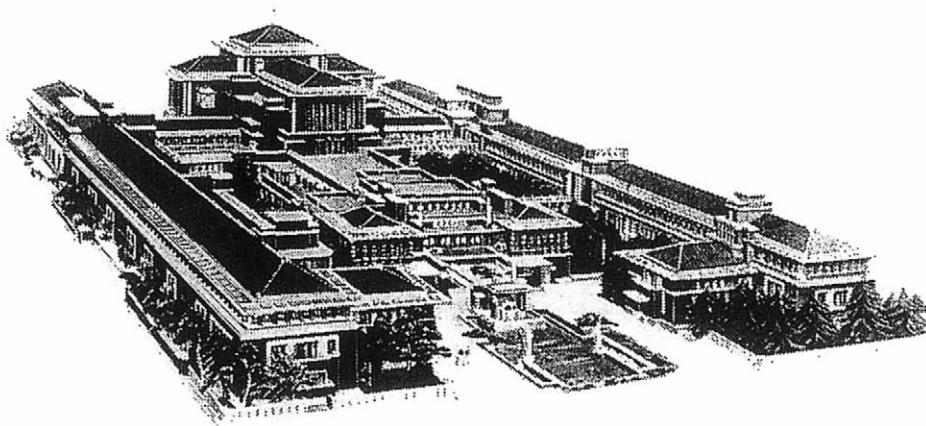


図3 帝国ホテル(ライト館)の俯瞰図  
(帝国ホテル提供)



図4 摂政宮御成婚祝賀の仮装舞踏会  
(出典：時事新報，大正13年1月28日)

況であった。「邦人と外人殆ど半々で日欧米の混合ダンスもオーケストラの奏楽にも異国情緒の色彩が多分に現れ各国大公使や一流の実業家や紳士、淑女の群がホールに居流れ<sup>(22)</sup>と、新聞は報じている。

大正13年1月27日の摂政宮御成婚祝賀仮装舞踏会の折りには、チケット（5円が489枚，2円が63枚）を販売して収益をあげた<sup>(23)</sup>。新聞によると、ホテル在宿外人、各国大公使館の少壮官吏、帝国ホテルの社長夫人、公侯伯の若殿や姫君、キネマの女優など約一千余名が舞踏を楽しんだという<sup>(24)</sup>。上流階級のみ招待客を限定した天長節夜会に対し、この舞踏会は社交ダンスを趣味とする富裕な人々がチケットを購入しての参加であった。

新聞に掲載の写真によると、この舞踏会では流行の耳隠し<sup>(25)</sup>に和服の日本女性が多い。荒木直範（1894—1927）<sup>(26)</sup>は、和服で社交ダンスを踊るのは推奨できないと言いながらも、「御振袖の令嬢が、巧みに長い袖に波を立たせて、眞に麗しく美術的に踊って居る人もある。是は、確に國民藝術とでも称す可きであらふ。」<sup>(27)</sup>

と、その美しさを認めている。摂政宮御成婚祝賀仮装舞踏会では、日本女性たちはローブ・デコルテより着慣れた和服をえらび、白襟紋服より略式ではあるが華やかな訪問着を着て、舞踏草履<sup>(28)</sup>をはいて西洋の社交ダンスを踊った。男性たちは、燕尾服かタキシードを着用し、ダンス専用に作られたダンシングシューズに履き替えて踊った<sup>(29)</sup>。テンポの速いダンスでも和服の女性が美しく見えるようにリードする男性のダンスの技とエチケットが要求されるようになったのである。

大正14年2月14日のセントヴァレンタインデーには、聖路加国際病院再建基金募集のための慈善仮装舞踏会を開催した。この舞踏会では、6人1組の食卓を87卓設け、これを競売にした。各卓いずれも300円<sup>(30)</sup>の値がつき、その1卓をバンクロフト大使（Edgar Addison Bancroft, 1857-1925）<sup>(31)</sup>が落札した。ホテルは、この売上金の一部を聖路加国際病院へ寄付したのであった<sup>(32)</sup>。

ライト館での舞踏会では、招待客のマナーの悪さが話題となることはなかった。舞踏会のマナーは日本人ダンス愛好家たちに定着したと考えられる。

ライト館の舞踏会では新しい音楽による社交ダンス、すなわち、ワンステップ、ツーステップ、フォックストロットが中心で、方舞は踊られなくなった<sup>(33)</sup>。これらの新しい社交ダンスは、音楽とダンスの踊り方は別々のルートで日本に導入された。

新しいダンス音楽の導入は、「船の楽隊」<sup>(34)</sup>のメンバーたちによる。彼らはアメリカで流行していたワンステップ、ツーステップ、フォックストロットなどの楽譜を大量に購入して日本に持ち帰った<sup>(35)</sup>。これらの音楽はラグタイムの曲で日本ではまだ珍しかった。また、新しい音楽による社交ダンスの踊り方は、第一次世界大戦（1914—1918）後、外国との往来が容易になってから外国で社交ダンスを習った加藤兵次郎のようなダンス・マニアたちによってもたらされた。

震災後東京の復興が進むにつれ、会員組織でダンスを教える所が方々にでき<sup>(36)</sup>、社交ダンスの大流行をきたした。カフェーや食堂などでも女給と客にダンスを踊らせているところがあったので、風紀を乱すとみた警視庁は規定をもうけてダンスの流行を抑えようとした<sup>(37)</sup>。

帝国ホテルでは、社交ダンスを生活の一部と考えている外人客との間にたつて、どのようにこの時を乗り切ったのか不明である。大正15年の舞踏会の記録は新聞やホテルの社史にも見当たらない。おそらく、新聞

などへの派手な報道を自粛したと考えられる。

## VI. ま と め

明治24年から初代帝国ホテルで始まった外務大臣主催の天長節夜会は欧米の上流階級の社交場に倣ったフォーマルな夜会であった。日本の上流階級の人々と外国の貴顕紳士淑女が集い、共に方舞や円舞を踊った。大正12年に竣工したライト館ではホテルの企画等による様々な目的の舞踏会が開催され、社交ダンスを趣味とする富裕階級の人々が集まり欧米で流行のワンステップ、ツーステップ、フォックストロットなどを踊った。これらの新しい社交ダンスを日本人が踊るようになったのは、第一次世界大戦後のことであった。この頃には、社交場において明治期に流行した方舞は全く踊られることがなかった。

開業当初から帝国ホテルは、日本に在りながら異国的で気品ある舞踏会を長年にわたって演出してきた。そこは日本の特別な世界であって、一般の日本人の生活からは遙かに遠いところであった。

## VII. 注および引用文献

- 1) ドイツ人。明治13年(1880)より御雇獣医学教師として駒場農学校で教える。その後の34年間、日本の獣医学や獣医界の開発と進展につくした。鹿鳴館の舞踏教師となったのは、農商務卿西郷従道とドイツ国公使フォン・アイゼンデッヒーとの話から、ヤンソンが最適任者であるということで、半ば命令によりダンス教師をつとめた。
- 2) 明治・大正時代の土木建築工学者。工学博士。工部大学校建築科卒業。鹿鳴館を設計したコンドルの教え子。工部省、内務省につとめ、ドイツに留学。ヨーロッパ各国を巡視、明治21年帰国。直ちに建築局工事部長となる。明治22年官を辞し、帝国ホテルを設計。明治27年海軍技師に転じ、舞鶴鎮守府建設などにたずさわる。
- 3) 武内孝夫, 1997, 帝国ホテル物語, p.10, 現代書館, 東京
- 4) 版画家。江戸本所の米蔵役人の子。広重、国芳らの浮世絵に加えて写真術や油絵を学び、洋風の風景版画により文明開化の都市風俗を活写。
- 5) 明治34年11月5日, 外務大臣の夜会, 東京日日新聞
- 6) 明治29年11月3日, 奉祝天長節, 東京日日新聞
- 7) 明治31年11月5日, 天長節夜会, 東京日日新聞
- 8) 同上
- 9) 同上
- 10) 外務省外交資料館蔵。ファイル『三大節関係雑件, 天長節之部3』(1893年)。舞踏会の手帖には舞踏のプログラムと舞踏を踊る予約をした相手の名前を記録する欄がある。舞踏会のエチケットでは紹介者なしに勝手にダンスを申し込むことは失礼であった。
- 11) 明治35年11月5日, 天長節夜会, 東京日日新聞
- 12) A. H. Franks, 1963, Social dance: A short history, p.147, Routledge & Kegan Paul Limited, London
- 13) 北海道函館市の呉服商の長男として生まれる。大正8年よりデパート経営の視察のため欧米を歴訪。ニューヨークでフォックストロット, ワンステップ, ツーステップを習い, パリでタンゴ, ポストワルツを習って大正9年に帰国。大正10年函館に「函館社交舞踏会」を結成。大正12年大阪に転居。大正13年難波新地のバー「コテージ」にアメリカ流ダンスホールのノウハウを紹介。ユニオン・ダンスホール, 夙川ダンスホールで教師を歴任。昭和6年宝塚会館の設立に招かれ, 以後マネージャー, 教師として活躍。昭和6年と昭和9年にダンス研究のために洋行, 流行の社交ダンスを持ち帰り社交ダンスの発展に尽くした。
- 14) 加藤兵次郎, 1935年9月号, 始めてダンスを習った時, ダンス音楽, pp.13-14, (和田博文蔵書)
- 15) ウィスコンシン州に生まれる。大学卒業後, L. サリバンの建築事務所で修業。1893年に独立する。シカゴを中心に活躍し現代建築の機能重視の傾向に対し, 建築材料と環境を重視し, 日本の近代建築にも大きな影響を与えた。1905年初来日, 日本文化に深い関心を寄せた。作品に自由学園, 帝国ホテル, カウフマン邸, グッケンハイム美術館などがある。
- 16) 愛知県犬山市明治村に移築されている。
- 17) 山口由美子, 2000, 帝国ホテル・ライト館の謎, p.164, 集英社, 東京
- 18) 大正13年6月7日午後8時10分, サバードダンスの直前に右翼団体「大行社」の壮士の一団が乱入, 剣舞を始め, 「亡國淫風の舞踏を絶滅せよ, 日米條約を破毀し彼我國人の入國を禁止せよ…」と反米ビラをまいた。いわゆる壮士乱入事件がおきた。その後, ホテルは約半年間舞踏会を中止した。



- 19) 帝国ホテル編集, 平成2年, 帝国ホテル百年史, p.378
- 20) 大正10年頃江戸前すし(並) 1人前は15銭だったから1円は一般の日本人にとって高額であった.
- 21) 小行生, 1924年9月号, 戀の世界幻の世界 帝国ホテルの舞踏場, 東京, p.129, 出版社不詳
- 22) 大正12年12月26日, 盛況を極めたクリスマス午餐一夜はダンスに異国情緒 昨日帝国ホテルに一, 東京日日新聞
- 23) 前掲19) p.274
- 24) 大正13年1月28日, 踊り狂ふ男女千餘, 時事新報.
- 25) 大正後期から昭和初期にかけて流行したヘアスタイルで, 耳を毛髪で覆い隠すように結った束髪.
- 26) 長崎県生まれ. 恵まれた家庭に育った. 大正4年にYMCAに入会. 青山学院高等科卒. 大正9年ロシアに渡り, ロシアのダンスを学ぶ. 同年ロシアより帰国後, 可兒徳およびYMCAでジムナスティックダンスを教えていたライアン(W. Scott Ryan)とジムナスティックダンス研究会を結成, 体育ダンスの普及に努めた. 大正11年より東京体操音楽学校で競技, 体操, ダンスを教える.
- 27) 荒木直範, 1923, 體育ダンスと社交ダンス, p.226, 日本評論社, 東京
- 28) 同上, p.227
- 29) 同上, p.227
- 30) 当時, 帝国ホテルの大倉取締役社長の月給は300円だった.
- 31) アメリカ人, イリノイ州出身. 1878年ノックス・カレッジ卒業. 1880年コロンビア大学法学部卒業. 1892年までゲールズバーグにおいて弁護士を開業, 後シカゴに移る. 1924年日本大使として赴任. 人柄の良さと温厚な外交政策によりわが国にも歓迎されたが, 1925年7月避暑先の長野県軽井沢で病死.
- 32) 前掲19), p.271
- 33) 前掲27), p.252
- 34) 明治40年頃, 東京音楽学校(現・東京音楽大学)の卒業生5人は日本人最初の「船の楽隊」として北米に向かった. 彼らの仕事は船内のダンスパーティーや食事時の音楽演奏であった.
- 35) 内田晃一, 1976, 日本のジャズ史, p.18, スイングジャーナル社, 東京
- 36) 大正14年6月23日, ダンスホールの内幕, 東京日日新聞(夕刊)
- 37) 永井良和, 1991, 社交ダンスと日本人, pp.64-74, 晶文社, 東京

(平成17年9月20日受付)  
(平成17年11月24日受理)

